

日蓮大聖人御書全集

おとごぜんごしよろそく

乙御前御消息

新版
1686
〜
1692

おとごぜんごししょうそく

乙御前御消息

けんじがんねん

がつ ちち

さい ちちによう

おとごぜん

建治元年(75) 8月4日

54歳 日妙・乙御前

かんど

ぶつぼう

渡

そうら

とき

さんこう

ご

漢土にいままだ仏法のわたり候わざりし時は、三皇・五

てい

さんおう

ないしたいこうぼう

しゅうこうたん

ろうし

こうし

造

たま

帝・三王、乃至太公望・周公旦・老子・孔子つくらせ給い

そうら

ふみ

けい

名

てんとう

て候いし文を、あるいは経となづけ、あるいは典等となづ

ふみ

ひら

ひと

れいぎ

教

ふぼ

知

く。この文を披いて、人に礼儀をおしえ、父母をしらしめ、

おうしん

さだ

よ

治

ひと

随

てん

のうじゆ

王臣を定めて世をおさめしかば、人もしたがい、天も納受を

垂

たも

違

こ

ふこう

もの

もう

しん

たれ給う。これにたがいし子をば不孝の者と申し、臣をば

ぎやくしん

もの

とが

当

がつし

ぶつきよう

逆臣の者として失にあてられしほどに、月氏より仏経わた

りし時とき、ある一類いちるいは「用うべもちからず」と申し、ある一類いちるいは

「用うべし」と申せしほどに、あもちらそい出来もうして召し合争わ

せたりしかば、外典げてんの者もの負まけて仏弟子ぶつでしか勝ちぶつでしかにき。その後のちは、

外典げてんの者ものと仏弟子ぶつでしを合あわせしかば、氷こおりの日ひにとくるがごと

く火ひの水みずに滅めつするがごとく、ま負くるのみならず、なものにとも

なき者ものとなりしなり。

また仏経ぶつきょう漸きたくわたり来ふつきょうりしほどに、仏経ぶつきょうの中なかにまた

勝劣しょうれつ・浅深せんじん候そうごいけり。いしょうじょうわゆる、小乗経しょうじょう・大乘経だいじょう、

顕経けんきょう・密経みつきょう、権経ごんきょう・実経じつきょうなり。

たと いったい いし ことがね たい いったい ことがね おと
譬えば、一切の石は金に対すれば一切の金に劣れども、
こがね なか じゅうじゅう いったい じんげん ことがね えんぶだんごん
また金の中にも重々あり。一切の人間の金は閻浮檀金
およ そうつら えんぶだんごん ぼんてん ことがね およ
には及び候わず、閻浮檀金は梵天の金には及ばざるがご
いっさいきよう ことがね しょうれつ せんじん
とく、一切経は金のごとくなれども、また勝劣・浅深あ
るなり。

しょうじょうきよう もう きよう せけん しょうせん
小乗経と申す経は、世間の小船のごとく、わずかに
ひと じんさんにとつ の ひやくせんにん の
人の二人三人等は乗すれども、百千人は乗せず。たと
にじんさんにとつ の しがん 着 ひがん ゆ
二人三人等は乗すれども、此岸につけて彼岸へは行きがた
し。またすこし少の物ものをば入いるれども、大おおなる物ものをば入いれ

だいじよう もう

たいせん

ひと

じゆう

にじゆうにん

の

うえ

がたし。大乘と申すは大船なり。人も十・二十人も乗る上、

おほ

もの

積

かまくら

筑

紫

陸

奥くに

至

大いなる物をもつみ、鎌倉よりつくし・みちの国へもいたる。

じつきよう

もう

か

たいせん

だいじようきよう

似

実経と申すは、また彼の大船の大乗経にはにるべくも

おほ

ちんぼう

積

ひやくせんにん乗

高

麗

なし。大いなる珍宝をもつみ、百千人のりて、こうらいな

渡

いちじようほけきよう

もう

きよう

んどへもわたりぬべし。一乘法華経と申す経も、またか

くのごとし。

だいばだった

もう

えんぶだいいち

だいかくにん

ほけきよう

提婆達多と申すは閻浮第一の大悪人なれども、法華経に

てんのうによらい

あじやせおう

もう

ちち

殺

して天王如来となりぬ。また阿闍世王と申せしは、父をころ

あくおう

ほけきよう

ざ

つら

いちげいっく

せし悪王なれども、法華経の座に列なりて一偈一句の

けちえんしゅ

りゆうによ

もう

じやたい

によにん

ほけきよう

結縁衆となりぬ。竜女と申せし蛇体の女人は、法華経を

もんじゆしりぼさつと

たま

ほとけ

成

文殊師利菩薩説き給いしかば仏になりぬ。

うえ

ぶつせつ

あくせまつぼう

とき

指

たま

まつだい

その上、仏説には「悪世末法」と時をささせ給いて、末代

なんによ

贈

たま

からふね

そうろう

の男女におくらせ給いぬ。これこそ唐船のごとくにて候

いちじようきよう

一乗経にてはおわしませ。

いっさいきよう

げてん

たい

いし

こがね

されば、一切経は、外典に対すれば、石と金とのごと

いっさい

だいじようきよう

げこんぎよう

だいにちきよう

かんぎよう

し。また一切の大乗経、いわゆる華嚴経・大日経・観経・

あみだきよう

はんにやきようとう

もろもろ

きようぎよう

ほけきよう

たい

阿弥陀経・般若経等の諸の経々を法華経に対すれば、

ほたるび

にちがつ

かざん

ありづか

萤火と日月と、華山と蟻塚とのごとし。

きょう しょうれつ

だいにちきょう

いっさい

しんごんし

経に勝劣あるのみならず、大日経の一切の真言師と

ほけきょう ぎょうじや

あ

みず ひ 合

合

つゆ かぜ

法華経の行者とを合わすれば、水に火をあわせ、露と風と

あ

いぬ しし

吠

はらわた 腐

しゅら

を合わするがごとし。犬は師子をほうれば腸くさる。修羅

にちりん

いたてまつ

こうべしちぶん

わ

いっさい

しんごんし

いぬ

は日輪を射奉れば頭七分に破る。一切の真言師は犬と

しゅら

ほけきょう

ぎょうじや

にちりん

しし

修羅とのごとく、法華経の行者は日輪と師子とのごとし。

こおり

にちりん

い

とき

かた

かね

ひ

氷は、日輪の出でざる時は、堅きこと金のごとし。火は、

みず 無 とき

熱

くろがね

焼

水のなき時は、あつきこと鉄をやけるがごとし。しかれ

なつ

ひ

合

けんぴよう

解

熱

ひ

ども、夏の日にあいぬれば堅氷のとけやすさ、あつき火の

みず

消

いっさい

しんごんし

けしき

尊

水にあいてきえやすさ。一切の真言師は、気色のとうとげ

さ、智慧のかしこげさ、日輪をみざる者の堅き氷をたのみ、
水をみざる者の火をたのめるがごとし。

当世の人々の蒙古国をみざりし時のおごりは、御覧あり

しようにかぎりもなかりしぞかし。去年の十月よりは、

一人もおごる者なし。

きこしめししように、日蓮一人ばかりこそ申せしが、よせ

てだにきたるほどならば、面をあわする人もあるべからず。

ただ、さるの犬をおそれ、かえるの蛇をおそるるがごとく

なるべし。

しやかぶつ おんつか

ほげきよう ぎようじや

これひとえに、釈迦仏の御使いたる法華經の行者を、

いっさい しんごんし ねんぶつしや りっそうとう 憎

一切の真言師・念佛者・律僧等にくくませて、我と損じ、

てん 憎 被 くに ゆえ

みなひとおくびよう

ことさらに天のにくまれをかぼれる国なる故に、皆人臆病

たと ひ みず 恐 き かね 怖 きじ

になれるなり。譬えば、火が水をおそれ、木が金をおじ、雉

たか 見 たましい うしな

鼠 ねこ 責

が鷹をみて 魂を失い、ねずみが猫にせめらるるがごとし。

いちにん 助 もの ととき たも

一人もたすかる者あるべからず。その時は、いかがせさせ給

うべき。

いくさ だいししようぐん たましい たいししようぐん 臆

軍には大將軍を魂とす。大將軍おくしぬれば、歩兵

おくびよう によにん おとこ たましい おとこ によにん たましい つわもの

臆病なり。女人は夫を魂とす。夫なければ、女人魂な

し。この世よに夫おとこある女人にょにんすら、世よの中渡りなかわたがとうみえて候そうろう

たましい

よ わた

たも

たましい

にょにん

に、魂たましいもなくして世を渡らせ給うが、魂たましいある女人にょにんにも

勝

しんちゆう

うえ

たましい

にょにん

すぐれて心中しんちゆうがいがいしくおわする上、神かみにも心こころを入れ、

ほとけ

崇

たま

ひと

すぐ

にょにん

仏ほとけをもあがめさせ給えば、人ひとに勝れておわする女人にょにんなり。

かまくら

そうら

とき

ねんぶつしやとう

そうら

ほげきよう

鎌倉かまくらに候そうらいし時は、念仏者等ねんぶつしやとうはさておき候そうらいぬ、法華經ほげきよう

しん

ひとびと

こころざし有

無

し

そうら

を信しんずる人々ひとびとは、志こころざしあるもなきも知られ候そうらわざりしか

ごかんき

被

さど

しま

なが

と

ども、御勘気ごかんきをかぼりて佐渡さどの島しままで流ながされしかば、問とい

とごら

ひと

にょにん

おんみ

おんこころざし

訪とごらう人もなかりしに、女人にょにんの御身おんみとしてかたがた御志おんこころざし

うえ

われ

きた

たま

現

ふしぎ

ありし上、我われと来り給きたいしこと、うつつならざる不思議ふしぎな

り。

その上、いまのもうで、また申すばかりなし。定めて神も

まぼらせ給い、十羅刹も御あわれみましますらん。

法華経は、女人の御ためには、暗きにもしび、海に船、

おそろしき所にはまぼりとなるべきよし、ちかわせ給えり。

羅什三蔵は法華経を渡し給いしかば、毘沙門天王は無量の

兵士をして葱嶺を送りしなり。道昭法師、野中にして

法華経をよみしかば、無量の虎来つて守護しき。これもま

た、彼にはかわるべからず。

じ さんじゅうろくぎ てん にじゅうはつしゆく 守 たも うえ ひと

地には三十六祇、天には二十八宿まぼらせ給う上、人に

かなら ふた てん かげ 添 そろろう いち

は必ず二つの天、影のごとくにそいて候。いわゆる、一

どうしようてん い に どうみようてん もう そう 加た 添

をば同生天と云い、二をば同名天と申す。左右の肩にそい

ひと しゅい とが もの てん 過

て人を守護すれば、失なき者をば天もあやまつことなし。

ぜんにん

いわんや善人においてをや。

みようらくだいし 宣 かなら こころ 加た よ

されば、妙楽大師のたまわく「必ず心の固きに仮って、

かみ まも すなわ つよ とううんぬん ひと こころ 固 加み 守

神の守り則ち強し」等云々。人の心かたければ、神のまぼ

かなら 強 そろろう

り必ずつよしとこそ候え。

おん もう いにしえ おんこころ もう

これは御ために申すぞ。古の御心ざし申すばかりなし。

いまいちじゅうごうじよう おんこころごし

とき

それよりも今一重強盛に御志あるべし。その時はいよ

じゅうらせつによ おん 守

強

思

いよ十羅刹女の御まぼりもつよかるべしとおぼすべし。

ためし

た ひ

にちれん

にほんこく

かみいちにん

例には他を引くべからず。

日蓮をば、

日本国の上一人よ

しもばんみん

いた

ひとり

過

いま

り下万民に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども、今

そこうろう

ひとり

こころ

強

ゆえ

までこうて候ことは、一人なれども心のつよき故なるべ

思

しとおぼすべし。

ひと

ふね

の

せんどう

計

ごと

いちどう

一つ船に乗りぬれば、船頭のはかり事わるければ一同に

せんちゆう

しよにんそん

み

強

ひと

こころ

おお

船中の諸人損じ、また身つよき人も、心かいたければ多く

のう

むよう

にほんこく

賢

ひとびと

の能も無用なり。日本国にはかしこき人々はあるらめども、

たいしやう

ごと 拙

甲斐

いき

つしま

くか

大将のはかり事つたなければかいなし。壱岐・対馬、九箇

こく

兵

なんによ

おほ

殺

国のつわものならびに男女、多く、あるいはころされ、あ

捕

うみ

い

崖

落

るいはとらわれ、あるいは海に入り、あるいはがけよりおち

者

幾

千

万

こんど

寄

しもの、いくせんまんということなし。また今度よせなば、

さき

似

きよう

かまくら

先にはなるべくもあるべからず、京と鎌倉とは、ただ

いき

つしま

さき

支

度

壱岐・対馬のごとくなるべし。前にしたくして、いづくへ

逃

たま

とき

むかし

にちれん

み

き

もう

もにげさせ給え。その時は、昔、日蓮を見じ聞かじと申せ

ひとびと

たなごころ

合

ほけきよう

しん

ねんぶつしや

ぜんしゆう

し人々も、掌をあわせ、法華経を信ずべし。念仏者・禅宗

なんみようほうれんげきよう

もう

までも南無妙法蓮華経と申すべし。

ほけきよう 能

しん

なんによ

かた

そもそも、法華経をよくよく信じたらん男女をば、肩に

担せ負せ

由

きようもん

み

そうろううえ

にない背におうべきよし、経文に見えて候上、

鳩摩羅炎さんぞう

もう

ひと

もくぞう

しやか負

たま

くまらえん三蔵と申せし人をば木像の釈迦おわせ給いて

そうら

にちれん こうべ

だいかくせそん替

たま

候いしぞかし。日蓮が頭には大覚世尊かわらせ給いぬ。

むかし いま いちどう

おのおの

にちれん

だんな

ほとけ

昔と今と一同なり。各々は日蓮が檀那なり。いかでか仏に

成たま

ならせ給わざるべき。

おとこ

たま

ほけきよう

敵

いかなる男をせさせ給うとも、法華経のかたきならば、

したが たも

随い給うべからず。

いよいよ

おんこころざし

いよいよ強盛の御志あるべし。

こおり

みず

氷は水より出でたれ

い

ども、水みずよりもすさまじ凄。青あおきことは藍あいより出いでたれども、

重

あゝ いろ 勝

おな ほけきよう

かさぬれば藍あゝよりも色いろまさる。同おなじ法華經ほけきようにてはおわすれど

こころざし

たにん

いろ

りしよう

も、志こころざしをかさぬれば、他人たにんよりも色いろまさり、利生りしようもある

べきなり。

き ひ 焼

せんだん き

ひ みず 消

木きは火ひにやかるれども、梅檀せんだんの木きはやけず。火ひは水みずにけさ

ほとけ ねはん ひ

はな かぜ 散

じようご

るれども、仏ほとけの涅槃ねはんの火ひはきえず。華はなは風かぜにちれども、浄居じようご

はな 萎

みず だいかんぼつ う

こうが い

の華はなはしほまず。水みずは大旱魃だいかんぼつに失うすれども、黄河こうがに入りぬ

れば失うせず。

だんみらおう もう

あくおう

がっし

そう

くび

き

答

檀弥羅王だんみらおうと申もうせし悪王あくおうは、月氏がっしの僧そうの頸くびを切きりしにとが

なかりしかども、師子尊者の頸を切りし時、刀と手と共に

いちじ

お

ほっしやみったらおう

けいずまじ

や

とき

一時に落ちにき。弗沙密多羅王は鶏頭摩寺を焼きし時、

じゆうにじん

ぼう

頭

破

十二神の棒にこうべわられにき。

いま にほんこく

ひとびと

ほけきよう

敵

み

ほろ

今、日本国の人々は、法華経のかたきとなりて、身を亡ぼ

くに

ほろ

もう

にちれん

じさん

こころ

し国を亡ぼしぬるなり。こう申せば、日蓮が自讚なりと心

得

ひと

もう

い

ほけきよう

えぬ人は申すなり。さにはあらず。これを云わずば、法華経

ぎようじや

い こと

のち

合

ひと

しん

の行者にはあらず。また、云う事の後にあえばこそ人も信

書 置

ずれ。こうただかきおきなばこそ、未来の人は智ありけり

知

そつら

とはしり候わんずれ。

また「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」とのべて

そちら み かる ほう おも み ころ ほう ひろ 述

候えば、身は軽ければ人は打ちはり悪むとも、法は重けれ

かなら み かる ひと う 張 にく ほう おも

ば必ず弘まるべし。法華経弘まるならば、死かばね還つて

おも 屍 おも ほけきようひろ し かえ

重くなるべし。かばね重くなるならば、このかばねは利生あ

りしよう いま はちまんだいぼさつ 齋

るべし。利生あるならば、今の八幡大菩薩といわわるるよ

齋 とき にちれん くよう なんによ たけうち

うにいわうべし。その時は、日蓮を供養せる男女は、武内・

わかみや 崇 思

若宮なんどのようにあがめらるべしとおぼしめせ。

ひとり もうもく 開 そちら くどく もう

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功德すら申すばか

にほんこく いっさいしゆじよう まなこ そちら

りなし。いわんや、日本国の一切衆生の眼をあけて候わ

くゞく

いちえんぶだい

してんげ

ひと

まなこ

ん功德をや。いかにいわんや、一閻浮提・四天下の人の眼の

廢

開

そうら

しいたるをあけて候わんをや。

ほけきよう

だいし

い

ほとけめつど

のち

よ

ぎ

げ

法華經の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義を解

もろもろ

てん

にん

せけん

まなこ

とううんぬん

ほけきよう

せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。法華經を

たも

ひと

いっさいせけん

てん

にん

まなこ

と

そうろう

にほんこく

持つ人は一切世間の天・人の眼なりと説かれて候。日本国

ひと

にちれん

怨

そうろう

いっさいせけん

てん

にん

まなこ

挾

の人の日蓮をあだみ候は、一切世間の天・人の眼をくじ

ひと

てん

怒

ひび

てんぺん

ち

る人なり。されば、天もいかり日々に天変あり、地もいか

つきづき

ちよう

重

り月々に地天かさなる。

てん

たいしやく

やかん

うやま

ほう

なら

いま

きようしゆ

天の帝釈は、野干を敬つて法を習いしかば、今の教主

しやくそん

たま

せつせんどうじ

き

し

いま

さんがい

釈尊となり給い、雪山童子は、鬼を師とせしかば、今の三界

しゆ

だいしよう

しようにん

かたち

いや

ほう

す

の主となる。大聖・上人は形を賤しみて法を捨てざりけ

いま

にちれん

愚

やかん

き

おと

り。今、日蓮おろかなりとも、野干と鬼とに劣るべからず。

とうせい

ひと

たいしやく

せつせんどうじ

すぐ

当世の人いみじくとも、帝釈・雪山童子に勝るべからず。

にちれん

み

いや

ぎようごん

す

そうろうゆえ

くにすで

日蓮が身の賤しきについて巧言を捨てて候故に、国既に

ほろ

悲

にちれん

ふびん

もう

でし

亡びんとするかなしさよ。また、日蓮を不便と申しぬる弟子

助

難

歎

おぼ

そうら

どもをもたすけがたからんことこそ、なげかしくは覚え候

え。

しゆつたい

そうら

おん

渡

いかなること出来し候わば、これへ御わたりあるべし。

みたてまつ

さんちゆう

とも

飢

じ

そうら

おとごぜん

見奉らん。山中にて共にうえ死にし候わん。また乙御前

大人

そうろう

賢

そうろう

こそおとなしくなりて候らめ。いかにさかしく候らん。

もう

またまた申すべし。

はちがつよっか

八月四日

にちれん

日蓮

かおう

花押

おとごぜん

乙御前へ